

10/29~30

# 平城貝塚発見120周年記念シンポジウム 「平城貝塚と縄文文化」

## 周辺で 人々



このイラストは縄文時代の人々の暮らしをイメージしたものです。

平城貝塚発見120周年を記念して平城貝塚の価値を今一度見つめ直し、遺跡の保全と今後の活用を考えるため、御荘文化センターで「平城貝塚と縄文文化」と題した企画展と記念シンポジウムを開催しました。

### ■基調講演

#### 「平城貝塚の発見と歩み」

平成7年に行われた第5次調査の陣頭指揮をとった日本考古学協会会員の犬飼徹夫さんの「平城貝塚の発見と研究の歩み」と題した基調講演では、明治24年に平城貝塚を発見した高知県の歴史家、寺石正路の功績やその人となり、発見から5次にわたる発掘調査の概要、出土した平城式土器を中心に西日本の縄文式土器の形式の変遷などについて詳しく解説していただきました。

### ■記念シンポジウム

基調講演に引き続き行ったシンポジウムでは、文化庁調査官の水ノ江和同さんをコーディネーターに平城貝塚の特徴や重要

### ■企画展

#### 「平城貝塚と縄文文化」

##### 平城式土器

平城貝塚から出土した縄文土器にはさまざまな文様が施されており、特に磨消縄文と呼ばれる文様があるのが特徴です。まず縄を土器の表面に転がすようにして縄目模様を付けたあと、棒状のもので溝を掘るようにして直線や曲線を付け、その間を磨り消します。磨消縄文は西日本の縄文時代後期に見られる特徴的な文様で、平城式土器は周辺での時間的変化を知る「標式土器」と位置づけられています。



##### 石器

平城貝塚からは数多くの石器が発見されています。これら石器の多くは、愛南町で産出される頁岩と呼ばれる石材が使われています。また大分県の姫島産出の黒曜石も発見されており、九州との交流があったことを物語っています。



**人骨** 昭和56年の第4次調査で完全な形で出土した人骨は、身長



満夫さんによるギャラリートークも行われ、約40名の参加者が熱心に説明を受けていました。

### ■おわりに

「平城貝塚」といえば、「名前だけには聞いたことあるけどどこにあるのか、どんな遺跡なのかは知らない」という人が多いのではないのでしょうか。

美しい磨消縄文の平城式土器や豊富な種類の貝殻、魚骨・獣骨、他に類を見ない貝笛など平城貝塚の遺物からは、遙か昔3500年前の私達の先祖の豊かな生活や文化が想像されます。

今回のシンポジウムを通して、平城貝塚が愛南町の代表的な遺跡であるとともに日本の考古学界における重要な遺跡であつて、さらなる学術調査と研究が必要であることを多くの方々が理解されたのではないのでしょうか。愛南町の貴重な文化遺産として後世に残すためにも、適切な保存と効果的な活用法を考えていかなければなりません。

130センチメートル、下あごが発達した縄文人特有の顔立ちで14から15歳の女性と鑑定されています。



### 魚骨・獣骨等

平城貝塚で出土した貝殻や骨から当時の食環境が読み取れます。貝類では、マガキ、ハマグリ、スガイ、ウミナナ類など現在でも美味しく食される豊富な種類が出土し、骨類では、イノシシ、シカなどの哺乳類やマイワシ、アジ、サバなどの小型魚からマグロ、サメ、マダイ、ハタなど大型魚も確認することが出来ます。



### 骨角器

縄文時代には、食料として捕らえた動物や魚貝類の骨や牙などを材料としてさまざまな道具を作っていました。平城貝塚からは鹿角製のヤス、牙や貝殻を使ったペンダントやイヤリング、貝輪（ブレスレット）、巻貝を使った貝笛などが出土しています。



の交流を物語る模様・形式を持つもの、また瀬戸内周辺との交流を物語る模様・形式を持つものが発見されていることから、平城貝塚は両文化の要となる重要な遺跡であることを指摘されました。

大分県埋蔵文化財センターの坂本嘉弘さんは、大分県姫島の黒曜石の出土から九州との一体的な縄文文化の実相が見えてくると共に、豊後水道を共有する地域の財産として平城貝塚を大切にしたいと訴えられました。

性、今後の保存・活用方法などが議論されました。愛媛大学法学部幸泉満夫さんは、出土した土器から同じ文化集団として九州周辺との交流を物語る模様・形式を持つもの、また瀬戸内周辺との交流を物語る模様・形式を持つものが発見されていることから、平城貝塚は両文化の要となる重要な遺跡であることを指摘されました。

最後にコーディネーターの水ノ江さんから、他の貝塚遺跡の保存・活用事例を挙げ、平城貝塚の保存・活用方法、新たな発掘調査の必要性を訴えられました。

翌日には平城貝塚の展示品を前に、犬飼徹夫さんと石丸恵利子さん、幸泉

### ■ギャラリートーク

